

2007年2月16日

大阪損保革新懇主催講演会

報道されなかったイラク戦争

講師 イラクの子どもを救う会 西谷 文和さん

なぜ、フセインの死刑執行を急いだのか

みなさん今晚は、西谷と申します。大阪損保革新懇の皆さんには三度目になります。よろしくお願ひします。DVD の上映とあわせて話を進めていきたいと思ひます。

今月25日からイラクへ行く予定をしています。今、イラクは1日100人単位で人が殺されていますが、考えてみればJRの尼崎の事故が毎日起こっていることになるのです。毎日、大変なことが起きているのですが、マスコミはほとんど報道しません。北朝鮮問題ではちょっとしたことで報道しますが、実際に毎日人が多く殺されているイラクやレバノンはまだ報道されません。

まず見ていただきたいのは、クラスター爆弾の被害とフセインが死刑判決の後、あわてたように死刑執行・殺されたのはなぜか、映像を見ながら説明していきます。

まず、クラスター爆弾の被害を見ていただきます。

これはフセインの時代、バクダットにあった空軍パイロットの養成所ですが、アメリカの空爆で見事にガレキになっています。子どもたちが写っていますが、この建物は全壊ではなくてまだ半壊です。これでもまだ残っているほうです。このガレキになった建物には人々が住みついており、この子の家はこの階段を上った所にあります。その家に案内されました。映像の子は5歳の男の子ですが、クラスター爆弾の不発弾で遊んでいたら、それが爆発してその鉄の塊が右目に入って眼球ごと奪われています。次のこの子はサッカーをしているときにクラスター爆弾を踏み、右足を失っています。今度は土壁が続いています。土壁の向こうは核施設でした。フセインの時代にここにウランを溜め込んで、核兵器を作ろうとしていた訳です。今回の戦争でフセインが倒され、この核施設が荒らされたのです。盗賊団が入り込んでいろんな物を盗んでいったのですが、盗んだドラム缶の中にウランが詰まっていたのです。盗人たちはウランを村に流れる川に投げ捨て、逃げたのです。ですから、イラク戦争後この村は異常な勢いで汚染されていきました。村には水道がありませんから、もちろんこの川の水を飲みます。野菜や牛乳や家畜も汚染され、生まれた子どもはこんな異常な姿の子供が続発したのです。間違いなく放射能の影響です。

つまりこういう村がイラクにあるのです。チェルノブイニみたいになっているわけですが、この村は非常に激戦地で、国連はおろかNGOも医者もジャーナリストも入れない。ここの住民はそういう中で日々を過ごしています。イラク戦争の戦死者は爆撃で殺された人を数えていますけれど、こういう人たちを加えれば何万、何十万人になるだろうと思われませんが、カウントされていません。

フセインは何をしたのか

次に見ていただきたいのは、サダム・フセインは何をしたかということです。

この映像はイラン・イラクの国境地帯です。あの山の向こうはイランです。こちらがイラクです。

今から見るのは、山のふもとのハラグジャという町です。ここは毒ガスを使われて一瞬にして虐殺された町です。イラクのヒロシマといわれている町です。毒ガス記念館が建っています。しかしこの記念館は自爆テロにあって今はもうありません。中に入って毒ガスの、虐殺の様子を写してきました。毒ガスは空気より重いのです。だから下に溜まるのです。田んぼで働いている人とか川原にいた人なんかは、催涙ガス、あるいはマスタードガスを吸い込んでバタバタとその場で倒れて死んでいるのです。

ヒロシマ・ナガサキの場合は爆心地にいた人が焼け焦げて、その場で倒れて死んでいきましたが、ここも爆心地に近い感じの所です。人々は下にいれば死んでしまうということに気がつくますので、きれいな空気を求めて山道を駆け上がって行くわけです。山道を駆け上がっていく時に折り重なって死んでいるのです。ヒロシマ・ナガサキの場合は喉が渴いたということで、川に水を飲みに行く時に折り重なって死んでいましたが、ここの場合は山なのです。

山か川かの違いはありますが、間違いなくこれは大量破壊兵器の仕業です。この時点ではフセインは大量破壊兵器を持っていたのです。持っていたどころか、使ったのです。

だから、アメリカがもし本当に正義というなら、この時点でフセインをやっつけておれば、まだ筋は通るのですが、この時点ではアメリカはまだ何も言っていません。見逃したのです。

それから15年経ちました。2003年です。今度は毒ガスも核兵器も何もなかったのです。今回は何もなかったのです。だが、ブッシュ大統領はイラクに大量破壊兵器があるといって、イラクを攻撃して、今なお現在進行形で人々を殺しているわけです。「イラクに大量破壊兵器がある」ということはウソだったことが明らかになりました。

この15年前、フセインはこのハラボジャだけでなく、あちこちに毒ガスを打ちました。何十万人が殺されたといわれています。ところがフセインは148人のシーア派の人たちを虐殺したという理由で死刑になりました。ハラボジャなどの大虐殺の真相が明らかにされず、148名のシーア派の人々の虐殺だけであわてるように死刑が執行されました。

それはなぜか。後で考えてみたいと思います。

このハラボジャの虐殺は、最近でこそ知られるようになって来ましたが、今まではあまり知られていなかったのです。今度行って、そこでまた新たな映像を撮りたいと思っています。

クラスター爆弾の恐怖

次に、クラスター爆弾について最新のレバノンの映像から見ていただきましょう。

去年、レバノンのヒズボラという所とイスラエルが戦争を始めました。イスラエルもレバノン人もたくさん死んだわけですが、イスラエル軍はクラスター爆弾をバラバラバラとばら撒いたのです。戦争終了前3日間で、その数が120万発にも上り、レバノン南部は大変なことになりました。その

様子です。これは朝日放送のムーブという番組に出た時の映像です。

これがクラスター爆弾の親爆弾です。飛行機から親爆弾が打たれます。この親爆弾は空中で爆発しまして、子爆弾がバラバラバラと飛び散ってくるのです。子爆弾の数は数百個です。空中でばら撒かれますが、その中にパラシュートをつけてフワフワと落ちてくるのがあるのです。このパラシュートをつけた子爆弾はファーと落ちてくるので不発弾になるのです。わざと不発弾を残しているのです。今日の新聞にもありましたが、クラスター爆弾は国際的にも使用禁止の動きが始まっていますが、このようなヒドイ爆弾です。(しばらくビデオを視聴)

これは洗濯物が干してあるすぐ横に、クラスター爆弾が落ちています。非常に危ないです。私はこの枠からは絶対に出るなと言われて、ここから撮影したのですが、このようなオリーブ畑に爆弾が転がっている。紐みたいなのがついていますね。これがパラシュートの跡なのです。わざとこういうことをしているのです。

去年の夏に3日で120万発落としたのですが、一つ一つマーキングをしてこのように除去していかなければなりませんから、除去するのは数年かかるといわれています。この爆弾の多くはアメリカ製です。アメリカ製のクラスター爆弾をイスラエルが使っている。イスラエルはこういうことをしたのですが、経済制裁も何の制裁もありません。北朝鮮のやりかたはもちろん悪いのですが、北朝鮮はまだ民間人を殺していません。イスラエルは民間人を殺しまくっているのに経済制裁がないのです。私は経済制裁をしろという立場ではありませんが、国際社会は非常に不公平だと思います。

アメリカ兵の遺体は何を語るか

次はかなり衝撃的な映像を見てもらいましょうか。この映像は去年ヨルダンのアンマンという所でレジスタンスグループからもらった映像です。

イラクは砂漠の国です。ゼンソクのアメ利カ兵がいたのか、それともあれを麻薬代わりに使っていたのかわかりませんが、イラクの砂漠に米兵が使っている薬瓶が落ちており、一人のイラク人がスコップでそのあたりの土を掘り返していくわけです。どんどん掘り返しますとアメリカ軍が使っている遺体収納袋が出てくるのです。中を広げてみますとかなり時間が経っていますから白骨化した遺体がでてくるわけです。これらはアメリカ兵の遺体なのです。それも一人や二人ではありません。砂漠の中からざくざくと、何個も何個も出てきたのです。これはどういうことか。

実はアメリカの国籍があつてアメリカ軍に正規に雇われている軍人がイラクで死ねば、それはちゃんとカウントされる。遺体はアメリカにつれて帰って葬式をしてもらえるのです。それが今約3000人を超えています。ところが実際のイラク戦争はそんな正規兵だけじゃないのです。

戦争が民営化されているのです。民間の企業が貧しい国、たとえば南アフリカ、ネパール、フィジーとかそういうところから若者を雇ってイラクで戦争させているわけです。民間の雇い兵がいるのです。このような雇い兵イラクで戦っているのです。

もし、雇い兵が戦死するとアメリカはその兵隊の出身国へ送り返したり、連れ帰る義務はない

のです。たとえば、ネパール兵はネパールにつれて帰る義務はないわけです。ところが遺体は現場に残ります。この遺体の処理に困ったアメリカ軍が時間があるときは穴を掘って埋めて管理するが、時間がない時はヘリコプターから投げ捨てていく。

この映像は「アメリカはこんなひどいことをしている」というアメリカの犯罪を告発したビデオですが、残念ながら、これはテレビでまだオンエアされていません。

つまり、アメリカ軍がいまイラクでやっている今の戦争は戦争が民営化されているということです。実はイラクに駐留する軍隊の中で最大の部隊はもちろんアメリカですが、第2位の部隊は今の殺されていた傭兵たちなのです。

皆さんは、今まで戦争というものは国と国とがするものだと思っておられたかもしれませんが、いまや企業がしているのです。民営化の本質は、その産業を民営化して大もうけしようとする人がいるということなのです。

民間戦争会社の仕組みとは何か

イラクで斉藤さんが殺されました。斉藤さんは民間人で戦闘行為をしていました。斉藤さんはハートセキュリティという会社に雇われていた人だったのです。ハートセキュリティという会社は英語ではPMCIと書かれている。Pはプライベート民間です。Mはミリタリーで軍事、Cはカンパニーです。つまり戦争をする民間会社というわけです。このような会社が世界にごろごろある。戦争で儲ける会社がごろごろある。

この戦争会社PMCIはどんな会社か。実は親会社がいるのです。たとえば、サウジアラビアのビンネルという戦争会社の親会社は、これはカーライルグループです。これはどんなグループかといいますと、世界中の大金持ちが儲け先を求めて投資をするという会社です。

「戦争は儲かる」というので戦争会社を持っている。で、このカーライルの役員は誰か。実はこれがブッシュの父。パパ・ブッシュです。今は引退していますが、かつてパパは役員でした。

ということはどういうことか。その子ブッシュが戦争を無理やり起こすと、戦争が民営化されていく。そうするとお父ちゃんの会社が儲かる、こういう仕組みになっているのです。このカーライルには世界中の大金持ちが集まるといいましたが、石油で大もうけしたサウジアラビアの大金持ちも入っているわけです。それは誰か。それはビンラディンです。あのビンラディンですね。

つまり、9・11のテロの前から、ビンラディン一族とブッシュ一族は同じ会社の役員と大株主だったのです。つまり金持ちネットワークの仲間内だったということなのです。

それでは民営化してブッシュやビンラディンが儲かる仕組みはどうなっているのか。一番左はペンタゴンです。莫大な戦争予算を持っています。この戦争予算の一部がPMCIなどの戦争会社に丸投げされます。PMCIは雇い兵をやとってイラク兵を殺していけば大きな収益が上がります。その収益は親会社に行く、という仕組みですね。

ハリバートンという石油会社は戦争会社を持っていますが、このイラク戦争で大もうけをして、全米31位から7位まで躍り出しています。つまりハリバートン丸儲けです。ハリバートンのうしろにチェイニーがいますから、チェイニー副大統領丸儲け、というこういう構図です。

それでは、サウジとブッシュの危険なつながりについてみて見ましょう。ちょっと前まで原油価格が1バレル70ドルまでいきました。クリントンの時代にバレルが20ドルだったのです。ということはこの間にもものすごい値上がりをしていたわけです。ということはサウジアラビアという国は空前のぼろもうけをしたわけです。

サウジアラビアは採油国世界ナンバーワンです。このサウジアラビアという国はどんな国か。

実は民主主義国家ではありません。一部の王様が牛耳っている国です。王様打倒といって民衆が立ち上がらないようにと王様はアメリカ軍や自分の軍隊を持つ。ということは、これはアメリカ側から見れば、サウジアラビアの石油で大もうけして、なおかつ自分の武器を売ってまた儲けている構図です。ですからアメリカは「二度おいしい」ビジネスをしているのです。このようにブッシュとサウジのつながりは非常に深いということですね。ビンラディンというのはサウジの王様に取り入れたゼネコンなのです。だから、ビンラディンとブッシュは深くつながっているという仕組みですね。

ブッシュとフセインの危険なつながりを検証する

それでは次に、ブッシュとフセインの危険なつながり、本当のつながりについて私が作ったDVDから見てください。

これはイラク南部のバスラの病院で生まれてきた子どもです。劣化ウランを大量に浴びている母親の胎内から赤ちゃんが一つの病院だけで5000人死んで生まれてくるのです。その多くの子どもがこのように脳がなかったとか、腕がくっついていたりとか、指がないとか、生まれつき白血病だとか、この映像は腸が出ているこどもです。この子は足がありません。この子はアザラシ指傷といって、アザラシみたいに腕がくっついてます。このようなこどもが多く生まれているのです。

つまり遺伝子が壊れているのです。つまり、劣化ウランによる放射能による子どもたちがイラク南部でいっぱい生まれているということなのです。これは女の先生が撮影したものです。

この映像はアメリカが空爆をした直後の様子です。不幸にも民家に当たってアパートが燃えています。中には逃げ遅れた人々がおり、焼き殺されている瞬間です。アメリカは自動車爆弾が恐いので自動車を撃ちます。自動車で単にドライブしている人も殺されています。

これはアメリカの占領に反対する大きなデモです。日本ではテレビは報道しません。テレビはテロしか報道ませんが、このようにアメリカ出て行けというデモもいっぱいあるのですが日本ではあまり知られていない。アメリカの占領に怒っている人がいっぱいいます。

私はおそらくアメリカはここ1～2年の間に撤退させられると思います。こういう人々のパワーがあるということです。

これは今イラク人を撃ち殺したところですが、でも彼らは捕まりません。無罪です。裁判もありません。

ハラボジャ市長の願い

この子は11歳のパルジャちゃんです。両親は毒ガス攻撃の数少ない生存者です。パルジャち

やんの体内には汚染された毒物が残っていたのかも知れません。毒ガスはハラボジャの大地、作物、家畜、水などを汚染しました。人間は植物連鎖の頂点にいます。あれから18年人々の体に汚染物質が蓄積されていったようです。サマワさんは毒ガスの記憶はなく、もの心ついた頃には左目を失っていました。サマワさんは日中外を出歩くことが出来ません。刺すような日差しは残された右目に負担なのです。サマワさんの隣はグラービスさんです。サマワさんグラービスさん親子は重傷を負いましたが、国境を越えイランに運ばれ九死に一生を得たそうです。

ハラボジャ市長が広大な草原に案内してくれました。ここからハラボジャの町が一望出来ます。市長はこの草原に平和公園を作りたいといいます。ヒロシマ・ナガサキのモニュメントを作り、日本とハラボジャを結びたいと熱意を込める市長。毒ガスと核兵器どちらも大量破壊兵器です。フセインは間違いなく大量破壊兵器を持っていました。いや、持っているだけでなく使ったのです。もしアメリカが本当の正義ならこの時点でフセインを攻撃するべきでした。なぜアメリカはこの時フセインを見逃したのでしょうか。

中東の歴史を振り返る ―アメリカとフセインは仲良しだった―

中東の歴史を振り返ってみましょう。

一般的に中東とは東はイラン、西はエジプトまでの広大な地域をさします。この中東の歴史が大きく動くのは1979年のことでした。まず、サダム・フセインがイラク大統領に就任します。次に、ソ連によるアフガニスタンの侵攻。最後にイラン・イスラム革命の勃発です。それまでのイランはアメリカの同盟国でした。しかし、アメリカの支配に反発する民衆がほう起し、「イスラム革命」が成功、アメリカとパーレビ国王をイランから追い出してしまったのです。革命の結果、権力の座に就いたのがイスラム主義のホメイニ師です。イラク・クエート・サウジなどの人々はイランの革命に刺激されます。「俺たちもイスラム革命に続け」と、民衆が立ち上がりました。ホメイニ師はこの立ち上がったシーア派イスラムに武器を供給し、この革命を支援しました。これはアメリカにとって一番イヤなことでした。

何故でしょうか。イラク・クエート・サウジ・UAEには豊富な石油が眠っており、アメリカはこれらの国々がイスラム化するのを防ぎたかったのです。ここで大統領になりたてのフセインが利用されます。「隣の国イランは革命をしたばかりだ。軍隊も弱体化している」「今なら勝てるぞ」フセインはアメリカのささやきに乗せられて一方的にイランに攻め込みました。こうしてイラン・イラク戦争が始まりました。

戦争は当初こそイラクが優勢に駒を進めましたが、次第に自力に勝るイランに軍配が上がりそうになります。「ホメイニだけには勝たせてはいけない」アメリカはこのとき、フセインを応援したのです。戦争末期混乱の中でクルド人が立ち上がります。この地図の白い部分がクルド人が死んでいる地域です。自分の国を持たない世界最大の少数民族であるクルド人はトルコやイラクから弾圧されてきました。彼らはこの混乱に乗じて打倒フセインで立ち上がったのです。フセインはイラン・クルド双方から攻められてはたまりません。焦ったフセインは立ち上がったクルド人に対して毒ガスを使用しました。ハラボジャの悲劇はこうして起こり、そして勝者無きままイラン・イラク戦争が

終わりました。

この時、フセインは間違いなく、毒ガスという大量破壊兵器を持っていたし、使用もした。しかしアメリカはフセインを非難しなかった。なぜなら、当時フセインはアメリカ側にいたからなのです。

8年もかけた戦争が終わりました。しかしフセインは不満でした。「イラン・ホメイニ革命の中東諸国への広がりをおレが戦争で止めてやったのに褒美も無いのか」と。焦るフセインにアメリカがささやきます。「クエートに攻めていってもアメリカは黙っているよ」ここでフセインは又も悪魔のささやきに騙されてしまいます。こうして、フセインはクエートを侵略します。

全世界に臨時ニュースが駆け巡った後、アメリカは手のひらを返します。「クエートを侵略するとは何事だ。お前は独裁者である」と。こうして多国籍軍が形成され湾岸戦争につながっていったのです。

このような歴史があるのです。話は元に戻りますが、おそらくフセイン処刑は口封じでしょう。ハラボジャをはじめ殺されたクルド人は10万人を超えるといわれています。10万人以上の虐殺を審理しないで慌てたように死刑執行をおこなったのです。ブッシュにとって非常に都合が悪いので、フセイン裁判は公開されませんでした。あれだけの罪を犯した男の裁判は本当は公開裁判が必要だと思います

いろんな映像からフセインとアメリカのつながりを見ていただきました。

9・11事件の「ナゾ」を考える

この21世紀私たちは平和でいたいと思っているのに、ずっと戦争が起こっています。

9・11事件からテロとの戦いが始まってアフガニスタンやイラクの戦争が起こり、日本も巻き込まれているわけですが、最近「9・11がかなり怪しい事件ではないか」と言われ始めています。

どうして怪しいといわれ始めているのでしょうか。

これはペンタゴンの写真です。ペンタゴンというのは5・6階建ての背の低い建物です。アメリカの発表では、この5・6階建てのペンタゴンに地上すれすれでボーイングが飛んできて、横から当たったという発表です。ボーイングというのは時速600キロから800キロで飛びますが、「操縦桿を握りたてのテロリストがこれをやるのは神業ではないか」という疑問が出ています。

この写真はボーイングの当たった穴です。消防士がいますが、これが開いた穴ですが、ボーイングは両翼40メートルもあるわけですが、明らかにこの飛行機より小さな穴しか開いてないわけです。もし本当にボーイングが当たったならもっと大きな穴が開くはずです。

さらに怪しいのがこの激突現場から飛行機のエンジンも出てきませんし、ブラックボックスというハイジャックされた時に音の残る絶対に燃えないように作ってあるブラックボックスも出てきません。何よりもそこに乗っていた人の遺体が出てきていません。

つまり、「ボーイングはペンタゴンに当たっていないのではないか。小型ミサイルを撃ちこみ、あたかもテロが同時に多発して、アメリカ権力の中枢であるペンタゴンもテロリストに狙われたかのような演出をしたのではないか」とも言われているのです。真相はわかりませんがこのような説が出てきているのです。

そう考えますと、WTC(ワールドトレーディングセンタービル)の疑問も出されています。皆さんも何度も見たように、WTCビル1・2に飛行機が激突し、このビルが見事に崩壊します。このビルは僅か10秒位で見事に垂直に崩れ落ちていくのです。ビル解体工事業者が解体したかのように崩れ落ちたわけです。「地震にも台風にも負けないように造られたはずの頑丈なビルが2つともあそこまで見事にほんとうに崩壊するのだろうか」という疑問が出されています。さらに疑問が深まるのは、この2つが崩壊した後、その同じ日の6時間後、今度は飛行機も当たっていないWTC7が崩壊します。地図でWTC7の位置を見ましょう。一番高いのがWTC1です。次が2です。1、2が崩壊して、背の低い3・4・5・6、とあってこれが7です。

このWTC7は47階建です。ニューヨークにあるとそれほど高いビルに見えませんが梅田にあれば空中庭園ビルぐらいです。この空中庭園ぐらいの建物が飛行機も当たっていないのに見事に崩壊するのです。なぜでしょうか。何も報道されていません。

それと、WTC1、2に飛行機が当たった直後と崩壊する直後だけヘリコプターが飛んでいるのです。あのヘリコプターはいったい何をしていたのかということ疑問も出されています。

それでは、実際の崩壊シーンを見ていただきます。

WTC1、2に飛行機が激突した直後と崩壊した直後だけ右上にヘリコプターが飛んで来ますので、見逃さないようにしてください。

この後、WTC7の崩壊シーンをお見せします。WTC7にはFBIやCIAの事務所がありましたが、崩壊したために何の証拠もありません。WTC7がなぜ崩壊したのか。アメリカ政府から明確な説明は5年も経ってもありません。

皆さんも、9・11の記憶がよみがえったと思いますが、私たちはこの事件を見てびっくりしたわけです。5年前の2001年9月11日。世界中の人がテレビの前にくぎ付けになった事件です。

ここで世界の歴史が変わっていくわけですが、これは事故なのか、テロなのか、アナウンサーも興奮して喋っています。

出てきましたね。ヘリコプターが右上に。あのヘリコプターはいったい何をしていたのでしょうか。

真相はわかりませんが、一説には、爆弾のスイッチを押したのではないか、ビルは爆弾を仕掛けないとこんな崩れ方はしないというのです。WTC2が今崩壊しました。ヘリコプターがもう上に出てきています。で、崩れ落ちていくわけですね。で、この崩れ方を見てください。これ鉄骨のビルです。木で出来たビルでもレンガで出来たビルでもありません。見事に垂直に自由落下のスピードで崩れ落ちたわけですね。外壁が落ちた後、中のコアの鉄骨が今、落ちました。

私たちはこの時、半ばパニックになっていたのです。何が起こったのか。これは何なのか。

この後ビンラディンの名前が出てくるのです。テロリストがやった。と言われそう信じ込まされていますが、はたしてそれは本当なのだろうか。今一度冷静にこの事件を見てみる必要があると思うのです。

次に WTC7、これは一瞬です。これは9月11日の同じ日の午後5時半です。これは別の角度から見たビデオがとらえた WTC7の崩壊のシーンですが、見事に崩れ落ちていきます。飛行機も当たっていない47階建のビルが崩壊するわけがないのですが、崩壊しています。この映像はテ

テレビでもいっさい報道されていません。今日初めて見る方も多いと思います。これはインターネットでしか今見ることが出来ません。

「簡単には、だまされないぞ」

これらは何を物語っているのでしょうか。つまり、私たちに「簡単にだまされないぞ」というメッセージではないのでしょうか。

最近の戦争というのは、結構嘘で始まっているのです。満州事変も関東軍の嘘ですね。大本営発表というのも嘘ばかりでしたね。「日本は勝っている。勝っている」「最後は神風が吹く」と。当時の日本人は騙されて戦争にかり出されていったのです。

このイラク戦争もそうです。「大量破壊兵器がある」と嘘で始まりました。ベトナム戦争もそうです。トンキン湾事件というアメリカのでっち上げでした。つまり戦争というのは嘘で始まる場合が多いのです。ですから、アメリカの政府が言うこと、日本政府が言うことを丸々信じたら非常に危険だということです。ところが今の日本の有権者は結構騙されているのです。

最近もっとも騙されたのは納豆ですね(笑い)。「納豆食べたらやせる」と。冷静に考えたらそんなわけはないじゃないですか。納豆食べてやせるなら、茨城県の人はいずれやせているはずではないか。誰だってそう思うはずです。ところが納豆を買いに走った。多くのところで売り切れになってしまった。今の日本の国全体が非常に危ういと思うのは、今回の納豆事件に似ていないか。いろいろなものに騙されて危険な方向へひっぱられようとしているわけです。

今回一番大事な憲法、特に憲法9条が変えられようとするこの国民投票。この国民投票でおそらく政府は騙しにかかってくるでしょう。「北朝鮮は危ない国だ」と報道すればするほど国民は「軍隊を持って備えないといかん」となっていく。

逆に、イラクを報道すればするほど国民は「アメリカのこんな戦争に日本は巻き込まれているではないか」「こんな戦争はアカン」ということになりますからイラクの戦争は報道しないのです。だから北朝鮮だけを取り上げる。結果として国民を騙そうとしている政府がいるということになるわけです。

みなさんが今日見ていただいた映像とか、今日聞いた話をぜひロコミで広げていただいて「憲法を変えない」「戦争をする国にしない」ように力を合わせて頑張っていきたいと思います。

大阪損保革新懇のみなさんの奮闘を期待して終わりたいと思います。どうもありがとうございます。
(大きな拍手)

(文責)大阪損保革新懇事務局

報道されなかったイラク戦争

講師：フリージャーナリスト

イラクの子どもを救う会

西谷 文和さん

2007年2月16日

大阪損保革新懇主催講演会